

瓢箪供養

野村胡堂

—

「あ、八じゃねえか。朝から手前を捜していたぜ」

路地の躑音を聞くと、銭形平次は、家の中からこう声をかけました。

「へエ、八五郎には違いえねえが、どうしてあつしと解つたんで？」

仮住居の門口に立ったガラツ八の八五郎は、あわてて弥造を抜くと、胡散そ
うに鼻のあたりを、ブルンと撫で廻すのでした。

「橋がかりは長げえやな、バツタリバツタリ呂律の廻らねえような足取りで歩
くのは、江戸中搜したって、八五郎の外にはねえ」

平次は春の陽溜りにとぐろを巻きながら、相変らず気楽なことを言つて居る

のです。

「へッ、呆あきれたものだ」

「俺の方でも呆あきれているよ。その登音の聞えるのを、小半日待っていたんだ」

「用事てえのは、何ですかい、親分」

「それが少し変てめえっているんだ。手前、昨日瓢箪供養ひょうたんくように行ったっけな」

「行って見ましたよ、筆供養や針供養はチョコチョコあるが、瓢箪供養てえのは江戸開府以来だ。あれを見て置かねえと、話の種にならねえ」

「どんな事をやったんだ、一と通り話してくれ、——少し変なことがあるんだが、瓢箪供養の因縁いんねんが解らなきや、見当がつかねえ」

平次は煙管のぼを伸して、腹這いになったまま一服つけました。

紫の烟けむりが、春の光の中にゆらゆらと流れると、どこかの飼うぐいすい鶯うぐいすの聲が、びつくりするほど近々と聞えます。長閑のどかな二月の昼下がり、——

「因縁も糸瓜へちまもありやしません、——寺島に住んで居る物持の佐兵衛、瓢々齋とか何とかいって、雑俳ざっばいの一つも捻ひねる親爺で、この男が、長い間の大酒で身体をいけなくし、フツツリ不動様に酒を断ったについては、今まで物好奇ものずきで集めた瓢箪が三十六、大きいのも小さいのも、良いのも悪いのもあるが、持って居るとツイ酒を入れて見たくなるし、人様に差上げて、酒を入れるより外に用事のない品だから、思い切って向島土手に埋めて供養塔を建てようという趣向しゅこうで——」

「なるほど少し変って居るな」

「三十六の瓢箪を自分の手で穴に埋め、その上に『瓢箪塚ひょうたんづか』と彫ほった石を押つ立て、坊主が二人にお客が五十人ばかり、引導を渡して有難いお経を読んで貰つて、それから平石ひらいしへ行つて一と騒ぎの上、桜餅を土産に帰つて来ただけのこと

で、何の変哲もありやしません」

「ところが変哲なことになったんだ、——その瓢々齋が昨夜死んだとしたら、どんなもんだ」

「えッ」

ガラッ八もさすがに膽をつぶしました。

早耳が何より自慢の自分が、少し間抜けにされたのは宜いとしても、昨日あんなに元気で、百までも生きるような事を言っていた瓢々齋が、その晩死のうとは、全く夢にも思わなかったのです。

「命が惜しくて酒を止めた人間が、その晩死ぬなんざ、少し皮肉過ぎやしませんか、親分」

「届出は頓死だが、——あの辺は石原の利助兄哥の縄張内だ。昼頃変な小僧が手紙を持って来たんだそうで、お品さんが持って来て見せてくれたよ」

「手紙にはどんな事が書いてありました、親分？」

「恐ろしく下手な字で、——瓢々齋が死んだのは、病氣や過あやまちじゃねえ、人に殺されたに違いないから、お上の手で調べてくれ——とこういう文句だ」

「へエ」

「一応おう石原の子分をやることにして、お品さんは帰ったが、——フト思い出したのは、二三日前てめえ手前が話していた瓢箪供養のことだ。どうかしたら八五郎のことだから、物好きに行つて見たかも知れないと、手前てめえの来るのを心待ちに待っていたのさ」

「物好きも満更無駄じゃなかつたわけで」

「ハツハツ、ハツハツ、その気でせいぜい間抜けなものは見て歩くがいい」

平次はカラカラと笑います。順風耳じゅんぷうじガラツ八の、倦うむことを知らぬ獵奇癖りょうきへきが、飛んだところで、飛んだ役に立つことは、随分ためしこれまでも無い例ではなかつたのでした。

「おや？ お客様ですよ、親分」

ガラツ八は聴き耳を立てました。

「お品さんらしいな、——こいつは面白くなって来たかも知れないよ。瓢箪供養は少し変り過ぎていると思つたが、矢張り変なことになつた様子だ、お品さんが自分で来るようじゃ真物だ」
ほんもの

二

平次とガラツ八が、寺島まで飛んで行つたのは、その日も暮れ近いころ、石原の利助の子分達がお係り同心とやって来て、検屍けんしもちょうど済んだばかりと
いうところでした。

瓢々齋というのは、元横山町で手広く金物問屋をして居た家の主人で、金に

も娑婆しゃばつ氣にも不足のない男でしたが、たった一人の伴佐太郎が、素姓のよくない女と一緒にになり、それがきっかけて勝負事に手を出し、果ては金看板きんかんぼんのやぐざ者になり下がってからは、いさぎよく久離切きゅうりきつて勘当し、自分も商売が嫌になったものか、横山町の店は人に譲ゆずつて、その身上を、地所と家作おびただと夥しい現金に代え、寺島村りょうむらの寮に引込んで、雑俳まゐ三昧の気楽な老後を送って居たのでした。

一緒に住んでいるのは横山町の店の支配をしていた甥おいの駒三郎という五十二三の男と、中年者の下女お滝、その亭主で下男をしている元助の三人だけ、外に瓢々齋の友達で、下手な雑俳たしなを嗜む露の家正吉という中老人、これは野幫間のだいこのような男ですが、筆蹟ひっせきが良いので瓢々齋に調法がられ、方々の献句けんくの代筆などをして、毎日のように入り浸びたって居りました。

変死人を病死ていの体にした駒三郎と元助夫婦は、さんざんの小言を食った上、

責任者の駒三郎は番所に引かれ、家の方は友達甲斐がに露つゆの家正吉やが、元助夫婦を指図して、どうやらこうやら、仏様の恰好をつけて居りました。

「大変だね、宗匠そうしよう」

「あ、銭形の親分、——瓢々斎も到頭死んでしまいましたよ」

正吉は平次の顔を見ると、いそいそ飛んで来て、訊かないことまでも説明してくれます。その言葉によると、今朝庭の池の中に、瓢々斎が上半身浸ひたつて居るのを、下女のお滝が見付け、亭主の元助を呼んで一緒に引揚げると、頸くびには麻縄あさなわが固く結付けてあり、縊くびり殺して池へ投ほうり込んだことはたった一と目で判ったということです。

平次とガラツ八は、死体を見せて貰い、庭も一と廻りしましたが、さて何の変ったところもありません。

「元助を呼んで貰いたい」

「へエ」

正吉は飛んで行って、人相のあまりよくない、無精髯ぶしようひげの五十男をつれて来ました。

「お前は元助だネ」

「そうですがすよ」

元助は平次の前へヌツと突っ立ったまま、およそ無愛想な様子を見せます。

「何時いつからこの家うちに居るんだ」

「奉公してから二十六年になるがね」

平次もそう聞くと、一寸ちよつと予想外でした。こんな人相の悪い男を二十六年も使っているのは、よくよくの事情があるか、でなければこの男は見かけに寄らぬ善人で、主人に腹の底から信頼されたせいでしょう。

「お神さんは？」

「あれは二十年にもなるかな、——五六年前に主人が仲人なこうどで、縁遠い同士一緒になつただよ」

そんな事をつケつケと言つてのける元助です。

「主人が夜中庭へ出たのを知らなかつたのかい」

「俺の寝て居るのは家の向う端だ、知るわけはねえ」

「駒三郎は？」

「これも知るめえよ、滅多めったに家に居ることのない人間だから」

「そいつはどう言うわけだ」

「番頭さんは、まだ若いだ、へッへッ」

元助はそう言つて口を緘つぐみます。若いと言われる駒三郎さえもう五十の上でしよう。

「主人はちよいちよい夜分に外へ出るのかい」

「それは判らねえ、が、雨戸を開ける音はチヨクチヨク聞くだ」

「何の用事で外へ出るんだ」

「へッ、そいつは知らねえ」

そう言いながら、元助の怪奇な顔かいきがニタリと笑うのです。

「知らないでは済まないぜ、——お前の心当りだけでも言ってみるがいい」

平次は大事な鍵キを見付けると、その微妙な感触を追って、ジワジワと追及ついきゆうしました。

「金でなきや女の事だんべいよ」

「？」

元助の言葉はそのまま謎でした。が、追及したところで、これ以上解るところへは行きそうもありません。

「勘当された伴せがれがあつた筈だが、あれは何処どこに居るんだ」

平次は話題を転じました。

「あれだよ、——あの家に居るだ。旦那が横山町の店に居なさる頃、この寺島の寮の隣の空家と、三百両の金をつけて久離切きゅうりっただ。金は一年経たないうちに費ってしまったが、家は辺鄙へんびで買手がないから、今でも自分で住んで居るだ」

「——」
如何にもありそうな事でした。平次はうなずいて次を促します。

「旦那が店を仕舞ってこの寮へ引込むと、勘当した倅の面見たくないと言って、境へ頑固がんこな生垣を結わせ、三年越し口もきいたことのない仲だ。こんな反そりの合わない父子を、おら見たこともねえ」

元助はそんな事まで言うのです。瓢々齋の寮の立派さに似ず、勘当した倅佐太郎の家というのは、僅か二た間ほどの小さいもので、仕切りの金目垣かねめがきは、いやが上にもよく茂り、野良犬の通路とも見えるかなりの穴が一つある外には、

木戸一つない因業いんごうなものでした。

三

番頭の駒三郎は、係り同心漆平馬うるしへいまの手で、嚴重に調べられました。が、昨夜は一と晩、内々小梅に囲かこっている、お為という女のところに、宵から朝まで居たことが判って、これは無事に帰されました。

隣に住んでいる倅の佐太郎も、親父との仲があんまり悪かったので、一応は調べられたのですが、これは講中のことで品川へ行つて一と晩留守、家には暮から重病で寝て居る女房のお松と、六つになる孫まごの春吉のたった二人だけ、淋しく留守をしていたと判って、これも疑いの圈外けんがいへそれてしまいます。

残るのは奉公人の元助とお滝の夫婦者だけ、これも二十年間無事に奉公した

人間ですから、人相が悪いとか、貯えが多過ぎるとかでは主殺しの疑いをかけるわけに行きません。

すると、下手人は外から入ったことになるわけですが、家の外から庭へ入るのは内木戸が嚴重で容易でなかったのと、わざわざ庭へ呼出して、頸くびに縄を付けて、池ほうに投げ込まれるまで、瓢々斎が音も立てなかったということは、どう考えても少しテニヲハが合わなくなります。

その晩、いざ神田へ引揚げようと言う時、

「八、こいつは少し変じゃないか」

平次はいきなりこんな事を言うのです。

「何が、変で？ 親分」

「瓢々斎は金があつて、曲りなりにも雑俳でもやる風流人だ。どう間違つても自害する気遣いはないと思つたのが、——少し怪しくなつて来たよ」

「すると、あれが自殺だというんですかい、親分」

これはガラツ八の方が余つ程おどろきます。人間は、自分の頸を絞めて死んでしまつてから、池へ上半身を突つ込むなんて器用なことが出来る筈ありません。

「一応人手に掛つて死んだように見えるが、外から入つて殺した様子はなく、一番怪しい駒三郎は留守だったんだから、疑えば元助夫婦だけだ、——その元助夫婦が主人の死んだのも知らず、自分の罪を隠す何の細工もせず、朝までぐっすり寝ていたのは変じゃないか」

「成程ね」

「疑いを駒三郎か元助に持つて行くように出来ているが、俺はどうも、大変な細工があるんじゃないかと思う」

ガラツ八は親分の考えを測りかねて、長い頤を天に冲させます。

「麻繩の新しいのは、水へ漬けるとギユツと縮むだろう、——瓢々斎が自分の頸を絞めて、いきなり池へ逆様に飛込んだとしたらどうなると思う」

「へエ——」

「麻繩はギューツと縮んで喉へ食い込むから、水ぶくれになった死骸は、人に絞め殺されて水に投げ込まれたようになるだろうと思うが——」

「驚いたね、親分」

「その証拠は、池のあたりは柔かい土だが、踏み荒らした跡は一つもない」

「——」

「明日は一つ池を漉ってみよう」

平次の考えは不思議なコースを辿って、先から先へと発展している様子です。

「親分の言い草じゃねえが、金があつて風流人だった瓢々斎が、何が気に入ら

なくて死ぬ気なんかになつたでしょう」

ガラツ八は新しい問題を出しました。

「そいつは俺にも解らねえが、酒の好きなのが、何かわけがあつて酒を止すと、急に死にたくなるんじゃないかあるまいか——」

「そんな事があつた日にや、酒も滅多に断たれねえ」

「瓢箪供養ひょうたんくようまでやつて、いよいよ酒を止したという晩、フラフラと死ぬ気になつたのは、そんな事じゃないかな」

これも併しかし平次の想像に過すぎません。

ガラツ八の八五郎は、それを後に聞いて、お勝手から、瓢々齋の部屋を捜して居りますが、

「親分、恐れ入った、——さすがは見通しだ」

何やらワメキ散らしながらやって来ます。

「何を騒ぐんだ、八？」

「瓢々齋の居間の押入おしいれに、飲みかけの貧乏徳利びんぼうどくりが一本、猪口ちよこが一つ隠してありますぜ」

「どれどれ」

手に取って嗅いで見ると、猪口にはまだ酒の匂いが残って、一升入りの徳利は半分ほど空になっております。

「こいつを知らなかったのかい」

ガラツ八は貧乏徳利を指して、うろうろしている下女のお滝に訊ねました。

「一向知りませんよ。旦那はお酒の吟味ぎんみがやかましくて、劍菱けんびしを樽たるで取って飲んで居ましたから、酒屋の徳利なんか家へ入るわけはありません」

醜みにくい四十女のお滝は、恐る恐る灯の中へ顔を突出します。

「その樽はどうしたんだ」

と平次。

「昨日瓢箪供養に持出して、残った酒を皆な塚へかけてしまった様子です」
それを聞くとガラッ八は舌舐めずりをしました。勿体なくてたまらない様子です。

「それで、この世の思い出の晩酌の分をそつと隠して置いたのだろう」

「成程ね」

「八、手前は、酒の鑑定は自慢だったな」

「それ程でもねえが」

「その徳利に残ったのを嘗めてみてくれ。剣菱か地酒か、それが判りゃいい」

「それ位のことなら判りますよ」

ガラッ八は徳利の酒を一口、上戸らしく、喉をゴクリと鳴らしました。



「どうだ、八」

「これは良い、——地酒なもんですか、劍菱ですよ、こんなのは滅多にこちとらの口へは入らない」

ガラツ八はもつと欲しそうに、ピタピタと舌を鳴らします。

「やはり死ぬ気だったんだね。本当に酒を止す気で瓢箪供養したのなら、たった一升だけ貧乏徳利に劍菱を残しておく筈はない、——夜中に急に飲みたくなれば、お滝を酒屋まで一と走りさせて、まずい酒でも何でも買わせるだろう」

平次の推理は、事件を次第に怪奇な——が犯罪性のないものにして行きます。

「自殺と決ったら長居は無用だ。引揚げましょうか、親分」

「待ってくれ、もう一つ、この手紙は誰が書いたか、元助と宗匠に鑑定して貰おう」

平次は——瓢々斎は人に殺されたに違いない——と、石原の利助のところへ

投込んだ、無名の手紙を取出して、露の家正吉と元助に見せました。

「見たことありませんよ、親分」

能筆のうひつで聞えた正吉は、蚯蚓みみずののたくったようなのを見て苦笑します。

「元助は？」

「へッ、おらには判りませんや」

元助はニヤリニヤリとしております。自分の無筆むひつを恥じての照れ隠しでしょう。

「上手な筆蹟を、わざと下手へたに見せたんじゃないやあるまいね」

平次は正吉に訊たずねました。

「そんな事はありませんよ。下手は上手の真似が出来ないように、上手は下手の真似は出来ないものです。字の呼吸こきゅうや字配りを知って居ると、左手で書いても、口で書いても、何となくうまさの出るものです」

正吉の言うのは尤ももつとでした。

「死んだ瓢々齋の字は？」

「あんまり上手じゃありませんが、こんな下手じゃありません。それに筆や墨がひどく悪いし、たったこれだけの文句に間違つた字や、仮名違いが三四カ所あるでしょう。雑俳ざっばいでもやる人間は、そんな事はしません」

これで、瓢々齋佐兵衛が、自殺した後で変な手紙が御用聞のところへ届くようにしたのではないかという、尤もらしい疑いも成立しないことになりました。

四

翌いけさら日、池漕いけさらいに行つた平次とガラツ八は、あまりの事に仰天げしかしました。瓢々齋のこの遺した寺島の寮は、店仕舞すずはと煤掃こわきと壊し屋を一けしかぺんにけしか嫉けたほどの荒ら

しようです。

門も、玄関も家の中も、——柱を抜き、床を剝し、天井も壁も、物の蔭という蔭は、手のつけないところはあります。

「これは何うしたことだ」

平次はさすがに気色けしきばみました。

「主人の遺した借金が、少しばかりではございません。その始末をするにいたしましても、主人は何の遺書もなく、有った筈の金も、何処に隠してあるか、一両と纏まとまったものも見付かりません。いたし方がないので、支配人の私が、先代と懇意こんいな正吉さんと相談の上、奉公人の元助夫婦立会いの上、家中を捜して見ました」

番頭の駒三郎は、悪びれた色もなく、こんな事を言つて居るのです。

「身内、親類の者に相談してはどうだ」

平次は唾つばでも吐はきかけたたい心持でした。余りにも見え透いいた弁解わけです。

「お気の毒なことに、御主人には身寄も親類もございません」

「俣の佐太郎は隣に住んでいではないか」

「あれは身持が悪いから、末始終親すえしじゆうの頸くびに縄なわをつけ兼ねない奴やつだと仰おっしゃって、

七年前に久離切ひさつて人別にんべつまで抜ぬきました。隣りに住んでいても口を利きいたこと

もございません。主人が亡なくなったからと言って、あの方かたを引ひ入れては、支配

人の私が相済あみません」

駒三郎の言い分は、一応尤もですが、平次には、その冷たさがなんとしても
 気に入いらなかつたのです。

「そう言ったものかな、大店おおだなの支配人しの物の考えようというものは。——が、

これから名主なぬしか五人組の立会の上でなきや、勝手な真似は止とめた方がいいぜ、
 つまらねえ疑いを受けることになるから」

「へエ——」

駒三郎も仕様事なしに承服しました。

「で、金があったのかい」

「横山町のお店を畳んだ時、五千両は残した筈ですが、家の中を見ると、たった一両もございません」

「皮肉だな」

ガラッ八はヒョイと口を出して平次に睨まれました。

「それほど念入りに捜したのに、どうして池の水を乾して見なかったんだ」

「親分さんが昨夜、——池は明日溌さくらって見ると仰しやったものですから」

駒三郎にもそれ位の遠慮はあったのでしよう。

「一体、当座の払いというのはいくらあるんだ」

「これだけでございます」

駒三郎の出した書附を見ると、愚ぐにもつかぬ諸払しよばらいがざつと十二三両、それも出入りの人足の手間や、酒屋米屋の払など勘定してあるのです。

「これが万両分限の瓢々齋の残した借金かい」

「へエ——」

「地所や家作もうんとあるということだ。こんな無法なことをしなくたって、諸払の恰好はつくだろう。庭石一つ、掛物一本売っても十二三両の始末はつくじゃないか」

「へエ——」

駒三郎は正に一言もありません。下男の元助は、醜みにくい顔をひん曲げて「それ見た事か」と言いたい様子です。

そんな事をしていゝうちに、ガラッ八は小さい水門を抜いて、池の水を干ほしました。深さ三四尺、たった五六坪ほどの池は見る見る綺麗に水を抜かれて、

よく手の届いた底を見せます。

「何にもない」

ガラッ八は少し物足りない様子でした。

「なきやなくていい、——どれ」

平次は駒三郎を追いやって、池を念入りに覗いて見ました。蓬よもぎも菖蒲しょうぶも芽を吹かない池は、岸の草まで、冬枯ふゆがれのままで、何の変哲もなく底をさらして居るのです。

「おや？」

平次は岸の泥の中から変なものを抜き出しました。

「子供の玩具おもちゃじゃありませんか、親分」

「笛だよ」

泥を拭くと、赤い段だらの横縞よこしまを書いた玩具の竹笛で、まだ少しも傷んでい

ないところを見ると、昨今池の水際みずぎわの泥に突き差したものでしょう。

「誰のでしょう」

ガラッ八は眉まゆをひそめました。

「こいつは飛んだ獲物かも知れない。黙っているんだよ」

「へエ」

平次は八五郎に口止めをして、竹笛をそつと袂に入れました。

「さア解らねえ、何もかも判じ物だ」

ガラッ八は忌々しそうに大舌打をしました。

「俺には段々解って来るような気がするよ」

平次は何か他のことを考えている様子です。

「第一に解らねえのは、死ぬ覚悟をした人間が、何だって瓢箪供養なんて、手数のかかる事をしたんだらう」

「何十年の間大事にしてきた、三十六の瓢箪を、自分と一緒にこの世から暇乞いとがしをさせたかったのさ。酒好きの考えそうな事よ」

「へエ——そんなものかなア、俺なんか酒は嫌いじゃねえが、まだ瓢箪と心中する気になったことはねえ」

「枘ますの角すみからばかり飲むからだよ」

「違ちがげえねえ」

八五郎は掌てのひらで額を叩きました。正に一言もない態です。

「そこで一つ、駒三郎か元助に、これだけの事を訊いて来てくれ、——瓢々齋ひょうたんは瓢箪を供養するのむきずに、無瑕むきずのまま埋めたか、それとも後で掘り出して使わないように、一々割るか切るか切るかしたか」

「へエ——」

「それから、まだある。——瓢箪を土手下まで持って行くのに、人手を借りた

か借りないか」

「それだけですか、親分」

「まア、そんな事でいい」

ガラツ八は飛んで行きました。

五

翌る日の朝。

「大変ッ、親分」

鉄砲玉のように飛んで来たのがガラツ八です。

「わッ、虫の毒だぜ、てめえ手前と付き合つて居ると、
落着いて飯も食つちや居られ

ねえ」

平次は文句を言いながらも、大したイヤな顔もせず、この早耳の天才てんさいを迎えました。

「落着いて飯なんか食って居られねえ、大変なんだ、親分」

「いつもの大変とは少し大変が違うようだね、どうしたんだい、一体」

「駒三郎が殺されましたぜ、親分」

「何？」

「場所は向島の土手下、瓢箪塚を掘り荒した前だ」

「本当か、それは、八」

「本当も嘘もねえ、大変な騒ぎだ」

「よしッ」

銭形平次は箸はしを投ほうり出すと、羽織を引っかけて、十手を懐にねじ込みざま、ガラッ八と一緒に飛び出します。

「まア」

よき女房のお静は、呆氣あつけに取られてその後姿、朝の春光の中に消え行く二人を見送りました。御用のことというのと、まるで火の付いた鼠花火ねずみはなびのように飛出す、夫の平次が少し怨めうらしかつたのでしよう。

一方平次とガラツ八は、向島まで駆けて行く道々、先刻の会話を続けました。

「手前、瓢箪のことを誰に訊いたんだ」

割って埋めたか、無瑕むきずのまま埋めたかという——あの一件を平次は指すのでしよう。

「駒三郎に訊きましたよ。すると駒三郎は——主人は誰かに掘出して使われると嫌だからと言って、わざわざ職人を呼んで、三十六の瓢箪ひょうたんを一々横真二つに挽ひき割らせ、それを自分で合せて、紐で縛って埋めましたよ——と言いながら、何か変な顔をして居ましたよ」

「それから」

「瓢箪を運んだ話も、——一つ一つ自分で運ばはこなくたって宜いわけですが、あの通りの気性で、何でも自分でしなきゃ氣に入らないんで——そんな事を言ったのも駒三郎です」

ガラッ八は昨日きのうの報告をもう一度くり返しました。

「しまったよ、八。駒三郎はそれを訊きかれたんで、死ぬような事になったんだ」
平次は思いも寄らぬ事を言います。

「それは、どういうわけで？ 親分」

「解るじゃないか、三十六の瓢箪に五千両の小判を隠したと氣が付いたんだ」
「えッ」

「瓢箪の口からは小判は入らない。瓢箪に隠すなら、横に割るより外に工夫はない。俺はそれを訊きたかったんだ。それで瓢々齋が死ぬ前の日に瓢箪供養を

したわけもよく解る」

「そいつは本当ですか、親分」

ガラッ八は、平次の袖を押えました。五千両の小判というと、大商人の代身代です。それを大小三十六の瓢箪に隠すというのは、何ということでしょう。

「駒三郎は曲者だ、くせもの五千両の金をさがしあぐんでいるところへ、その事を聞いてハッと気が付いた。多分夜になるのを待ち兼ねて行ったんだらう。寮から土ど手の瓢箪塚は三十間とは離れちゃいない」

「塚を掘って瓢箪を取出したところを、出し抜いた仲間の悪者に見付かり、その場を去らず殺されたんだらう」

「成程ね、まるで見ていたようだ」

そんな事を言っているうちに、足の早い二人、わたしぶね渡船を飛び出して、寺島へ着

いて居りました。

土手下の瓢箪塚のあたりは、真つ黒な人ばかり、利助の子分が二三人、声を涸^からしてそれを追っ払っております。

「銭形の親分」

利助の子分達も、かかり合いで来て居る露の家正吉も、ホツとした様子です。

人垣を分けて飛込んだ平次も、自分の予想と寸分違^{すんぶん}わぬ現場の様子に、物をも言わずに立ち竦^{すく}みました。それは実に恐ろしい暗合です。

瓢箪塚は無慙^{むざん}に掘り荒らされて、中から取出した瓢箪は、一つ一つ合せた紐を切つて割られ砕^{くだ}かれ、その瓢箪の殻^{から}と泥の中に、脳天を胡桃^{くるみ}のように叩き割られた駒三郎は、紅に染んで倒れていたのです。

「親分、こいつは誰の仕業でしょう？」

露の家正吉は恐る恐る顔を出しました。

「恐ろしい力のある野郎だ」

平次はそう言つて、駒三郎の脳天を叩き割つた、泥と血潮だらけな鍬くわを指しました。

「後ろへ忍び寄つて、自分の使つて居る鍬で打たれるのを、知らずに居たでしようか」

ガラツ八はさすがに急所に気が付きます。

「夜更けなら知らずにいる筈はない、多分仲間だろう」

「仲間？」

「だが、お気の毒なことに小判は瓢箪の中になかった」

「どうしてそんな事が判るんです、親分」

「割つた瓢箪はたった五つだ、あと三十一ひもは紐ひもで縛つたままになつて居る、持上げるか振つて見るかして、皆んな空からっぽなんで諦めて行つたんだろう」

「人間一人を無駄に殺したわけで」

「駒三郎も殺されるような事をして居たんだろう、それにしてもイヤな事だな」
平次はひどく不機嫌です。

その時、小梅の方から飛んで来た女が一人。

「駒三郎さんが殺されたんですって、そんな事が本当にあるんでしょうか」
取乱した風で瓢箪塚へ来ると、駒三郎の死体を一と目、ワツと取りすがりま
した。

「あれは誰だい」
と平次。

「お為ですよ」

ガラッ八は囁ささやきました。

お為はあたり構たいしゅうたんぬ大愁嘆で、

「お前さん、何て事だろうね、いつも命を狙っている者があるって口癖に言つてたけれど、まさか、こんなになろうとはねえ、——きつと敵は討つてやるから、一と言、たった一とこと言つておくれ、矢張り、あの佐太郎かい、——自分が勘当されたのをお前のせいにして居たそうだから、——ね、駒さん、ね」

惨憺^{さんたん}たる死体を揺ぶり揺ぶりの大口^{おおくぜつ}説です。

六

お為の嘆きを聞捨てて、平次とガラッ八は寮の裏へ大廻りに、佐太郎の家へ行きました。

「あれは、親分？」

眼の早いガラッ八が指したのは、朝陽を明々と受けて、昨夜から干し忘れた

らしい半纏はんでんが一枚、裏の物干竿ざおに引っかけてあつたのです。

近寄つて見ると、胸のあたりへなすり付けられた血潮と泥。

「――」

平次は黙つて眼を見張りました。

「ね、親分、これだけで証拠は沢山でしょう、佐太郎の奴をしょつ引いて行きましようか」

ガラツ八は囁きます。

「証拠はこれ一つでたくさんだ、佐太郎は下手人じゃないよ」

平次の言葉は予想外でした。

「親分」

「不足ふそくらしい顔をするなよ、――俺もお為の言うのを聞いて、てつきり下手人は佐太郎と思ひ込んだが、ここへ来て見ると気が変つた」

「へエ——」

「何処の世界に、血の附いた半纏はんてんを、これを見て下さいと言わぬばかりに、天道様とうさまの下にさらして置く下手人があるんだ」

「——」

「それに、あれはゆうべ取込み忘れた洗濯物で、まだ洗って手を通していないよ。あんなに袖なんか突っ張って居るじゃないか、洗濯物せんたくものを胸に当てて、人を殺す奴もないだろう」

「——」

「まだある、下手人の着物なら、血が飛沫しぶいている筈だ、あれだけひどく殴ったんだもの、——ところがあれは血を拭ふいたんだぜ」

平次の言葉は星を指すようです。

「成程な、恐れ入った、さすがは銭形の親分」

「おだてちゃいけない」

二人は踵くびすを返そうとしました。

「銭形の親分」

不意に後ろから呼ぶ者があります。振り返って見ると、三十二三の小意気な男が、雨戸の蔭から、丁寧に挨拶しているのです。(編注)

「お前は？」

「佐太郎でございます、——今のお話は他所よそながら聞いてしまいました。有難うございます。親分さん方が、そんなお心持とは知らずに、不貞腐ふてくされて知ってることことも申上げず、親父が死んでも顔を出さずに居りました」

佐太郎は陽の中へ顔を出すと、頬を濡らして泣いていたのです。

「お前は大した悪人でもないようだ。何だって勘当されたり、奉公人にまで遠慮りやくをしなきゃならないんだ」

平次は濡れ縁に腰を掛けました。

「勘当されたのは、これと一緒にになったのが切っかけで——」

佐太郎は後ろをふり返ります。枕屏風の蔭には長患いの女房お松が、形ばかりの夜の物を着て青白い顔をのぞかせて居るのです。

「それはどうも腑ふに落ちないよ、——お神さんは商売人あがりというわけでもなかったそうだが」

「あんなに親父が腹を立てるとは、私も知りません。ツイ一緒になっちゃおうと、火のついたような怒りようで、この家と三百両の金を貰って七年前に久離切られました。それから吞む、打つで」

「父親が、お前を傍へ置きたくない事でもあったんじゃないのかな」

「そんな事があったかも知れません」

「何か変わったことに気が付かなかったのか」

「そう言えば駒三郎は甥おいでも従弟いとこでも何でもないのに、世間へは親父の甥と触れ込んで、店の事を一切取仕切つて居りました。——それから、元助も、奉公人のくせに、恐ろしく贅沢ぜいたくで、親父をせびる事ばかり考えて居たようでございます」

佐太郎の話には、何か深い仔細しさいがありそうですが、平次の勘かんでもこればかりは解りません。

「お前は何処で育つたんだ」

「遠州ですよ、——里にやられて十二三まで育つた頃、江戸から迎いが来て引取られたのが、今の親父の横山町の店です」

「駒三郎か元助を、子供の時見た覚えはないのかな」

「少しも覚えがありません、江戸へ来て始めて見た顔です。尤も、露の家正吉という男には見覚えがあります。あれは左の耳に瘤こぶがあつた筈ですが、いつの

間にやらそれはなくなっていました。二十七八年も前に、浜松で見た顔です」

「そいつは何かの役に立つだろう」

併し、佐太郎からさぐれる話はそれっ切りでした。立上がつて帰ろうとする
と、チョコチョコと飛んで出たのは、六つばかりの男の子、小柄で色白で、男
人形のように可愛らしいのが、大した人見知りもせず、平次とガラッ八の前
に立ってニコニコして居ります。

「これは、お前さんとこの総領かい」

「春吉と言いますよ、まだ六つになったばかりで」

「こんな可愛い孫があるのに、瓢々斎の祖父さんも、ろくに顔も見ずに死んだ
んだらう、気の毒な」

思わずそんな事を言う平次、佐太郎はさすがに顔を背けました。屏風の蔭で
は鼻を吸る音が――

「おや？」

ガラツ八はつと足下を見ました。気のきいた懐中煙草入ふところたばこが一つそこへ落ちて居たのです。

「こいつはお前めえのかい」

平次はそれを拾って、佐太郎に見せました。

「飛んでもない、そんな洒落しやれたものを持てる身分じゃございません」

「こいつは飛んだ良い物が手に入ったよ」

平次はそれを懐中に入れて、立去りました。

七

その足で平次は、遠州浜松の城主七万石松平豊後守ぶんごのかみの上屋敷に飛んで行き、

御留守居の役人から何やら聞き出しました。

「今日の仕事は少し大きいが、合点か、八」

門を出ると、いつになくいきり立って居ります。

「どんな事をやらかしゃいいんで？」

「まア来てみるがいい」

二人はもう一度向島へ、——もう日は暮れかけて居ります。

瓢々齋ひょうとうさいの遺した寮へ行くと、平次はいきなり下男の元助をつかまえたのです。

「御用ッ」

「あッ、何をするんだ、縛られる覚えはねえ」

「黙れッ、今から二十八年前、浜松の城下で、御用金三千両盗んだ大泥棒の片

割れ、手前は般若はんにゃの元吉だろう」

「あッ」

「八、そいつを縛ってしまえッ」

「応ッ」

乱闘は一瞬しゅんにしておわりました。元助の元吉は八五郎に組伏せられて、キリキリ縛り上げられます。

「もう一人居るんだ。そいつは番屋へ預けて、一緒に来い」

平次とガラッ八は、引返して中なかの郷ごうへ飛びました。

露の家正吉の家へ裏表から入ると、

「あ、これは銭形の親分、丁度お茶が入ったところだ、まず一服」
などと言うのを、

「御用だぞ、遠州の正太、神妙にせい」

平次の十手はピシリとその肩を打ったのです。

「あッ、俺はそんなものじゃない、この露の家正吉は、縛られるような悪事を

働いたことはない」

「黙らないか。二十八年前三千両の御用金を盗んだ四人組の一人、その左の耳の瘤いぼを取った疵痕きずあとが何より証拠、浜松様の御屋敷に聞き合せての上だ、間違いはない」

「嘘だ嘘だ」

「その上五千両の金を搜さがして、駒三郎まで殺した筈だ、神妙にせい」

「違う違う、あれは元助の仕業だ」

「いや元助じゃない、佐太郎に罪を着せるつもりで細工をしたのは、手前の悪知恵だ」

「その証拠は——」

「この懐中煙草入が物を言うぞ、印伝いんでんの吠かますに銀煙管、こいつは下男かますの持つ品じゃねえ」

「えッ、こうなれば頭巾を脱いでやろう。いかにも俺は遠州の正太、安岡つ引に縛られるような三下じゃねえ」

「何をッ」

ここでも乱闘は瞬時に片附きます。二十八年前の巨盜は、口ほどにもなく、平次やガラッ八の敵ではなかったのです。

二人を縛って番屋に並べ、証拠を揃えてピシピシ平次は締め上げました。こうなると、もう嘘も隠しありません。

今から二十八年前の旧悪、瓢々斎佐兵衛と駒三郎と正吉と元助の四人が、浜松の御用金三千両を盗んで高飛し、四人で均等に分配して、それぞれ正業に就く筈でしたが、本当に正業に就いたのは、後の瓢々斎こと佐兵衛たった一人で、あと三人は半歳経たないうちに費い果し、二三年後には横山町で大町人になって居た佐兵衛のところへ転げ込んで、散々嫌がらせの限りを尽しながら食い下

がつていたのでした。

商才しょうさいのある駒三郎は甥おいと名乗って番頭になり、人相のよくない元助は下男に、
文筆ぶんぴつのある正吉は我儘者で友達ということになりましたが、二十六年間三人の
搾しぼった額は容易なものではありません。

佐兵衛は商売上では申分なく成功しましたが、この旧悪きゅうあくが何時露頭ろけんするかも
知れないのを恐れて、伴佐太郎に難癖つけて勘当し、寺島の寮の隣に住わせま
したが、三人の悪人に見張られて表向の交通もなり難く、散々搾しぼられ脅おどかさ
れた挙句あげく、到頭自殺をして、この旧悪の責苦から逃れる工夫をしたのでした。

自殺を他殺と見せたのは、駒三郎や正吉や元助に対する嫌がらせで、瓢箪供
養は五千両の金の隠し場所をカムフラージュする洒落しゃれでしょうが、それにし
ても、真物の五千両は、一体どこに隠してあるでしょう。

二人の悪人を、下っ引に護らせて奉行所に送らせた後、平次はガラツ八と二

人、小判捜しで荒され抜いた寮の縁側に腰を掛け、湿しめっぽいような春の月に照らされて、何時までも何時までも考えて居りました。

「八、考えてみる、五千両という大金だ、この寮の何処かに隠してあるに違いない。それを捜さなきゃ、この仕事は仕上がったとは言えねえよ」

「五千両は大きいね、親分、五千両大福餅を買ったらどんな事になるだろう」
八五郎は相変らずこんな事を言うのです。

「馬鹿野郎、大福餅を五千両食う奴があるものか」

「一朱の家賃を先払にしたら、何年気楽に住めるだろう」

「呆あきれた野郎だ、手前の言うことは、一々子供染じみているよ、——子供と言や、いつかこの池で見付けた玩具の笛だが、こいつがどうも一と役買って居るような気がしてならねえ」

「そいつをピーと吹くと、親分も子供付き合いが出来るといふものさ」

「その気で一つ吹いて見るか」

平次はそう言いながら、竹笛を口に当てて、二つ、三つ、ピー、ピーと吹いて見ました。

「こいつは夜っぴて吹いたって、浮れる気遣いはない、が、飛んだ愛嬌があつていいね」

二人は声を合せて笑いました。何処からともなく、おほろ朧を染めるような梅の匂い――。

「おや？」

八五郎は早くも気が付いて池の後ろを指しました。頑丈な金目垣がんじょう、その一箇所に野良犬の潜くぐる通路が一つあることは、平次も早くから目をつけておりましたが、その穴をガサガサ潜って、小さいものがヒョイと此方の庭へ飛込んで来たのです。

「おや、春吉じゃないか」

佐太郎の一粒種ひとつつぶだね、死んだ瓢々齋の孫に当る、あの可愛らしい男の児が、何のおそ俱れ気もなく、縁側に並んでかけて居る二人の前へ歩いて来るではありませんか。

「小判をおくれよ」

おどろき呆れる平次の前へ、春吉は小さい手を出しました。振り仰いだ顔の可愛らしさ。

平次はしばらく呆気を取られて居ましたが、やがて、何やら呑込んだ様子で、懐中から小粒つぶを二つ三つ取出して、春吉の掌ての上に載せてやりました。悲しいことに、銭形平次の懐中には小判などが入っているのは、一年に幾度もないことだったのです。

「また来るよ」

春吉はギラギラする小粒を、しばらくは怪訝けげんそうに眺めて居りましたが、それでも小判の仲間と思つたか、スタスタと金目垣に引返すと、元の穴をくぐつて、自分の家の方へ行きます。

「八、あれを何処へ持つて行くか、見張っているんだよ」

「心得た」

囁ささやく二人。子供はそんな事に構わず、気軽けいせうに歩いて、お勝手の前の井戸の側へ行くと、用心のためにしてある、嚴重ふたな蓋の隙間から、ポトリと中ほうへ投り込んだのです。

「しめたッ、これで五千両の行方が判つた」

平次とガラッ八は、表から飛出すと、大廻りに廻つて佐太郎の家へ飛込みました。

×

×

平次はその晩下谷の松平豊後守上屋敷へもう一度行って留守居の役人に逢い、二十八年前に盗まれた、御用金の三千両を佐兵衛の倅せがれの名で返しました。その上、正太（正吉）、元吉（元助）二人の悪人を召捕ったことを報告して、死んだ佐兵衛の遺族いぞくには、係り合いなしという事にして貰いました。

「こんな清々せいせいしたことはないな、八」

もう夜半過ぎの街を、神田の自分の家へ、二人は軽い心持で急ぎました。

「井戸の中から小判が出たときは驚いたぜ」
とガラッ八。

「それより俺は、竹笛を吹いて子供の出て来た時の方が驚いたよ、——瓢々齋はあの笛を吹いて、人知れず孫に逢い、悪人に狙われている五千両の金を隠させて、死ぬ支度したくをしたんだね」

平次は何となくホロリとした心持です。

「でも、あれで佐太郎も助かったわけだね、親分。女房の養生も出来るだろうし、二千両ありゃ——」

「そんな事は言わない方がいい。皆な忘れて仕舞うことさ」

「ところで、たった一つ判らねえ事があるんだが、——お品さんが持って来た手紙は、ありや誰が書いたんでしよう」

「判ってるじゃないか、佐太郎さ。隣の家で親父おやしが死んだと聞いて、何か、あんな手紙を書きたくなつたのさ、おや、もう家だよ」

「姐御が待つて居るぜ」

そのとき女房のお静は、寝もやらず二人の躰音あしおとの近づくのを待つていたのでした。

(編注)

底本では佐太郎の年齢を二十二三としていますが、後段の文脈と嶋中文庫版に基づいて三十二三に改めました。

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

初出―「オール讀物」昭和十四年二月号 文藝春秋社

底本——「錢形平次捕物全集」第五卷 河出書房 昭和三十一年七月十五月初版

編集・発行 錢形俱樂部



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>